第10回 モーツァルト交響曲 全曲演奏会

2012年5月13日(日)

◆開演◆ 14:30◆

—会　場—

安曇野市穂高交流学習センター

「み　ら　い」

主催：モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会

後援：松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・(社)才能教育研究会
信濃毎日新聞社・SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・(公財)八十二文化財団

よこしまかつと

少年から青年へ変身する多感な年齢のモーツァルトには、珠玉のような作品が数多くあります。その中で2曲の短調作品がひときわ異様な輝きを放っているのが目につきます。三回に亘るイタリア旅行のあと三度目に訪れたウィーンで得た音楽上の体験が、このウィーン滞在中ないしザルツブルグに帰郷後に生み出された数々の作品に映し出されていますが、その中でも特筆すべきものが「短調体験」でした。あの映画「アマデウス」の冒頭に流れる衝撃的な映像と音楽。記念すべき第10回全曲演奏会ではその短調交響曲の代表作の一つ、第25番について考察していきたいと思います。

【短調作品への過剰な形容詞】

ドビュッシーは、ベートーヴェンの第九シンフォニーについて、かつて次のように書いた。「《第九》は長いこと、形容詞の霧に包まれてきた。奇妙な理由を付けて『神秘的』というレッテルを貼られてきたモナ・リザの微笑みと同じく、ベートーヴェンのこの交響曲は、最も馬鹿げたコメントがなされてきた傑作である。これまで、こうした言葉の洪水に沈没してしまわなかったのが不思議なくらいである」。これほど極端ではないにせよ、同じことがまさしく、モーツァルトの二つの ト短調シンフォニー・・・有名な第40番KV550と、いわゆる「小ト短調」第25番KV183・・・をめぐる言葉についても言えるだろう。18世紀のシンフォニーの大多数は、長調で書かれている。そしてそれは、シュルツのいう「大いなるもの、祝祭的なもの、高貴なもの」の楽観主義を表現するように思われる。これに対し、数少ない短調作品は、より暗く悲観的で、より情熱的な感情をあらわす。それ以上の過剰な形容詞は、音楽史を発展史と解釈する視点から生じたものにほかならない。この視点はモーツァルトの短調のシンフォニーをロマン主義時代の記念碑的傑作シンフォニーの前兆ないし先駆けと見なす。そしてその流れを汲む者たちはKV183が前ロマン主義的あるいは原ロマン主義的な作品であるとし、それを、「1770年前後におけるオーストリア・ウィーン音楽ロマン主義的危機」の結果であるとするのである。すなわちそれは、クリンガーの同名の芝居を受けて「疾風怒涛＝シュトゥルム・ウント・ドラング」と呼ばれてきた文化的傾向の産物だ、ということになる。

●交響曲 ト短調 Sinfonie in g KV183(173dB)
(17歳 1773年10月5日、自筆譜の日付は消しつぶされている。ザルツブルグで作曲)
Allegro con brio, Andante, Menuetto-Trio, Allegro

【モーツァルト最初の短調交響曲《小ト短調》】

モーツァルトの交響曲作品の中でも、ト短調交響曲KV183(173dB)は、ひとつならずの理由から、重要な作品である。この曲は、単に短調で書かれた彼の最初の交響曲であるばかりでなく(ケッヒェル第6版によれば、それに先立って34曲の交響曲が書かれているが、いずれも長調である)、彼の最初の大きな管弦楽作品でもある。初期の交響曲のうちでも、何曲かは、沢山のすぐれたできばえの細部を含み、管弦楽の秘訣に対するモーツァルトの驚くべき理解力を証明しているのは確かである。しかし変ホ長調KV184(161a)〔第4回全曲演奏会で演奏〕の暗く荘重な緩徐楽章

を除いては、概してそれらには、このいわゆる《小ト短調》交響曲の特徴となっている鋭い鮮烈な性格、磐石な構想、強力な統一性といったものが欠けている。この交響曲が《小ト短調》と呼ばれるのは、のちのより名高いト短調交響曲第40番KV550との類比からであり、この二曲はその調性のみならずその精神においてもお互いによく似ている。

《小ト短調》、この雛形傑作が奇妙な孤立を呈していることは、ひとりならずの研究者の関心を惹いてきた。というのも、この《小ト短調》交響曲の根源にある精神を、モーツァルト自身他の作品の中で捉え直し、一層充実したものに仕上げるまでには、多くの歳月が必要だったからである。
イ長調交響曲第29番KV201〔第5回全曲演奏会で演奏〕がどんなに完璧なものであるといったところで、そこにはこの《小ト短調》交響曲を特徴づけている抑え難い情熱はその影もない。
《小ト短調》はモーツァルトの叛逆的な精神の唯一の現われであった。この叛逆的精神の現われは、これまで様々に説明されてきた。文筆家のいくたりかはそこに、モーツァルトのザルツブルグ大司教宮廷に対する内に秘めた遺恨…ウィーンで新たな地位を獲得しようとした1773年夏の試みの失敗によって、一層掻き立てられた遺恨…の反映を見ようとした。また他の人々、中でも特にラールセン教授（ハイドン研究家）はその近著の中で、この作品にあまり意味を負わせてはならない、むしろそこには、この時期ハイドンによって書かれた短調の交響曲との最初の接触の成果を見るべきだ、と考えている。
この二つの意見は、それぞれ真理の一端を担ってはいるだろうが、そのどちらも真理全体を完全に包含しているとはいえまい。モーツァルトが、ザルツブルグでの田舎暮らしに非常に不満であったのは確かである。また、ハイドンがそのすぐれた一連の短調交響曲をすべて1768年から1772年の間に書いたのも事実である。しかしこのト短調交響曲は、モーツァルトの叛逆的な精神よりも、音楽的な意味ではるかに深い根源的な力の現われなのである。同様に、ハイドンのこの時期の交響曲も、孤立的な例と考えるよりは、この時代オーストリアおよびオーストリア音楽の内部ばかりでなく、ドイツ語圏のすべての国々を通じてその文学の分野をも席捲した、激しい精神革命の部分的な現われと考えたほうがよい。この「精神革命」の威力と拡がりとをよりよく説明するために、いまわれわれが問題にしている時代の一般的状況を手短に要約してみよう。

【ウィーンにおける「改革」】

われわれが普通「シュトゥルム・ウント・ドラング」と呼びなれているこのウィーンの新しい様式は、一種興味深い集団的感情危機を反映している。この危機は、決してひとりの作曲家にだけとどまるものではない。その起源を明らかにするのはむずかしい。この時代の資料をわれわれがほとんど欠いているからである。残された作品、それらがすべてである。ハイドンの手紙で、この頃の日付をもったものは一通も知られていない。
モーツァルト一家の膨大な量の書簡でも、それについては一言も触れられていない。この時代のフランス、ドイツ、オーストリア、イギリスの新聞にもいかなる資料も、見出されない。しかしこれと並行する動きが、ドイツの文学には存在している。もっとも、それが頂点に達するのはその数年後、

この文学革命の最も重要な二つの作品、ゲーテの『ヴェルテル』(1774年) クリンガーの『疾風怒涛』(1776年)の出版を以ってであるが。後者の題名は、のちにこの文学運動全体を指すのに用いられるようになった。

この時代のウィーンの交響曲は、通常どのような様式であったか想起してみよう。1760年頃好まれたのは、メヌエットを含む四楽章の演奏会用小交響曲であった。第一楽章のソナタ形式は萌芽的でしかなく、第二楽章はアンダンテ、まれにアダージョ。メヌエットとトリオの後、短いフィナーレが続く。メヌエットはちょうどこの頃、定着し始めていた。ハイドンの初期の交響曲などは大部分、メヌエットを欠いているし、ウィーンに比べてザルツブルグでは、交響曲の中にメヌエットを置くことはあまり流行していなかった。この時代の平均的なウィーン風交響曲作曲家といえばディッタースドルフであろう。その彼のシンフォニーのなかでも数年後ロマン的危機に見舞われた作品を見ることができる。1770年頃に書かれたト短調交響曲である。同じ現象がハイドンの音楽においても起こっている。形式上の変化が最初に認められるのは1766年のことである。1767～68年はさらに意義深い年である。1767年にハイドンは、その「シュトゥルム・ウント・ドラング」様式の最初の大きな作品である《スターバト・マーテル》をト短調で書いた。1768年には暗い第49番の交響曲ヘ短調《受難》を作曲し、さらにこの年、あるいは翌年に第26番二短調《嘆き》、第39番ト短調を作曲した。これらの短調の交響曲はその音楽的側面のみならずその感情内容においても、まったく革命的だったのである。

ウィーンの改革の主な特徴は次の通りである。まず短調の使用。次いで対位法技術のより頻繁な使用。そして最後にシンコペーションが、非常に重要なディテールとなっている。(今回演奏する第25番KV183の冒頭を参考)このシンコペーションの始まり方は、この時代の典型的なもので、ハイドンやヴァルハンにおいてもやはりシンコペーションに出会う。この新しい様式のもうひとつの特徴はフィナーレにはるかに重要性を置いていることである。当時この二人は傑出した存在であった。彼らはこのロマン的危機を一般に代表しており、また彼らの交響曲はモーツァルトがそれをモデルに使ったという点で特に興味深い。

【《小ト短調》の意味するもの】

1770年前後に始まった、このウィーンでの改革は、音楽史の上で非常に重大な意味を持っている。というのは、それが偉大な古典派時代の幕開きを告げるものだったからである。交響曲、弦楽四重奏曲、ピアノ・ソナタなどは、もはや、人々に快さを与え、楽しませるという唯一の目的に従うものではなく、より深い、知的で徳義にすら関わる問題を反映するようになったのである。ハイドンとモーツァルトによって、新たな偉大な伝統への第一歩、ベートーヴェンと十九世紀の伝統に向けての第一歩が、ここに踏み出されたのである。

●交響曲 ト長調　Sinfonie in G KV318
（23歳　1779年4月26日、ザルツブルグで作曲）
Allegro spiritoso, Andante, Primo Tempo

ケッヒェル作品目録のすべての版と同様に、新全集もKV318には「序曲」というサブ・タイトルを付けており、広く普及したブライトコプフ社の版も、この作品を「イタリア様式による序曲」と呼んでいる。こうした呼び名は妥当なものとは考えられるものの、はっきりした根拠があるわけではない。それは、明らかにコンサート・シンフォニーと劇作品の序曲を区別をするという意図から出たものである。しかしモーツァルトの時代には、シンフォニーと序曲にはようやく見分けられるかどうかというわずかな差しかなく、モーツァルト自信の実践も、そのことを立証している。モーツァルトはこの作品のスコアに何のタイトルも付けておらず、ただ単に「一七七九年四月二十六日、ヴォルフガンゴ・アマデーオ・モーツァルト作」と書いているだけである。
自筆スコアは、フルート、オーボエ、ファゴット二本ずつ、ホルン四本、弦楽器を要求している。
一方、ザルツブルグで成立し、ウィーンでの「複製」が加えられ、自筆による修正の入ったパート譜セットには、トランペットとティンパニのパートが含まれていない。しかしモーツァルトは、現在自筆譜とともに保存されている独立した二葉の用紙に、トランペット・パートを書いた。このタイプの用紙は、モーツァルトが主として1782年と83年に使用したものである。したがって彼はこの頃に、ウィーンにおける自分のコンサートでKV318を演奏したに違いない。

●フルート協奏曲 ト長調　Konzert in G für Flüte und Orchester　KV313（285c）
（22歳　1778年1月か2月　マンハイム作曲）
Allegro maestoso、Adagio ma non troppo、Rondo/ Tempo di Menuetto

成立年代は《新全集》による。KV314（285d）同様、ネーデルランドのアマチュア演奏家フェルディナン・ドジャンの委嘱。ドジャンは1778年2月14日にモーツァルトに報酬を払っている。
ただしこの協奏曲はもともとマンハイム宮廷楽団のフルート奏者 ヴェンドリングのために書かれたものと想像される。ヴェンドリングが示してくれたモーツァルトへの温情を意気に感じて、モーツァルトは筆をとったに違いない。

★参考文献　「モーツァルト探求」 海老沢 敏著、「モーツァルトのシンフォニー」 ニール・ザスラウ著、
「モーツァルト大事典」 ロビンズ・ランドン著